

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22500534

 研究課題名（和文） 躍動する身体を取り戻すダンス学習
 ～「リズムダンス」の学習内容の検討～

 研究課題名（英文） Dance learning which regains the energetic body
 ～Consideration of learning contents for "Rhythm dances"～

研究代表者

寺山 由美 (TERAYAMA YUMI)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：60316784

研究成果の概要（和文）：

本研究は、リズムダンスの学習内容を明らかにすることを目的に行われた。熟練指導者の指導、中学生の実態、実践実験等から以下のことがわかった。リズムダンスの学習内容とは、「リズムダンス」というものを教えるのではなく、「リズムダンス」を通して、コミュニケーション能力や表現力を伴った身体の育成をはかる過程を重視したものといえる。教えるべき内容をステップ等の既存の運動技術を教えることを第一義に定めるのではなく、学習中に学習者間で起こる活動が重要である。

研究成果の概要（英文）：

This study was conducted for the purpose of clarifying the learning contents of "Rhythm dances". Through investigation of expert coaching, actual conditions of junior-high school students and practical experiment, following factors became apparent.

It seems that the learning contents of the "Rhythm Dance" includes not only about teaching contents of the dance, but also attempting to nourish learners' body development which consists of communication skills and expressiveness.

In other words, in a dance class, it is vital to pay attention to inter-relationships between learners, rather than only focusing on providing learners with existing motor skills such as steps.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			0
年度			0
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：舞踊方法論

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 身体教育学

キーワード：体育、リズムダンス、指導方法、ダンス学習

1. 研究開始当初の背景

平成 10 年から、学習指導要領の「表現運動・ダンス」領域に、小学校には「リズムダンス」、中学校・高校には「現代的なリズムのダンス」が新たに導入された。「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」（以下、「リズムダンス」）とは、「現代に息づき、楽しんでいる種々のリズム系ダンスの総称であり、特定のダンス・スタイルを指すものではない」と説明されている。つまり、「リズムダンス」は、リズムカルな音楽に乗って自由に踊ることを学習の目的にしているといえる。では、「リズムダンス」の学習はどのように行うのか。「リズムダンス」では、学習者が自由に踊れることを保障するために、既存のステップを指導することは最小限にすることが求められている。その理由は、既存のステップやフレーズを学習者に教え込んでしまうと、その動きのコピーに重点が置かれ、学習者自らの動きの発現を期待できなくなるからである。

平成 20 年の学習指導要領改訂により、中学校 1・2 年生の男女必修化となり、男子学生の履修もさらに増加することが考えられるが、その指導法は浸透しておらず、現場の教員の中には、ダンスビデオやメディアで展開されているダンスを学習者に見せてコピーさせるなど、間違った指導法を展開している指導者も少なくない。その原因として、「リズムダンス」の学習内容が明確に浸透していないことが考えられる。さらに、先述した通り、「リズムダンス」は特定のダンス・スタイルを教えるものではないため、何をどの程度教えるかという指導法が混乱していることが予想できる。

2. 研究の目的

本研究では、「表現運動・ダンス」領域における、「リズムダンス・現代的なリズムのダンス」の学習内容の検討を通して、学習者の心身が躍動する学習モデルを作成し実践することを目的とする。

また、以下の 2 つの具体的な課題と仮説を立て、研究を進めた。

<具体的な課題>

①指導者が学習者へ「与える」ことと、「引き出す」こと（どこまで教えて、どのように学習者を学ばせるか）を具体的に示し、その仕組みを明確にする。

→仮説 1) リズムダンスを指導するにあたり、「与える」要素が必要であろう。

②躍動する身体（リズムに乗っている身体）

とはどのような状態かを、動作解析から具体的に明示する。このことにより、学習の到達点を共有することができる。

→仮説 2) リズムに乗れる身体になる程、骨盤が横方向に動くようになるであろう。

3. 研究の方法

(1) 熟練指導者である A 氏（国立大学教育学部教授）の授業の参与観察を行い、指導者の授業のはこび等に注目して、「指導のおさえ」を観察した。そこから、指導者が「リズムダンス」の授業で重要視している点を明らかにする。加えて、指導者へのインタビュー調査、学習者への質問紙調査、授業のビデオ撮影および授業分析を行う。

(2) 数校の中学生対象のダンス授業実践を観察し、考察を深める。

(3) 自ら指導案を作成し、指導者が定める動きを習得させる指導法と、指導者が定める動きを極力少なくした指導法の 2 つを展開し、学習者の動きがどのように変化したかを考察する。

4. 研究成果

(1) 熟練指導者の授業観察

①熟練指導者の授業観察概要

平成 22 年度、研究対象である熟練指導者の本務校での授業および、各県で行われる現職教員対象の講習会等に出向き、合計 14 回の観察を行った。その内、7 回は単元授業として同一の学生に対して毎週行われる授業であった。

②単元の授業では

単元で行われた授業は、教育学部保健体育科 1 年生 22 名を対象としたダンス領域の内容であった。毎回、学生に対して資料が配付された。授業のねらいとして、「コミュニケーションスキル（人とのかかわる力/いじめ予防）の育成」「表現する力」「授業デザイン力」「マナー（連絡・報告・相談）」を確実に身につけることとされた。評価の観点は、「授業への取り組み」「各領域のスキル」「1 時間毎の達成度」であり、これらを総合的に評価すると示された。授業毎に評価の視点を明確にされた評価シートが配付され、他者の評価や自己評価を学生にさせていた。

③単元の授業内容

各授業の導入では、「ランニングエクササイズ」というかなり運動量の多いエクササイズのようなウォーミングアップを行って

いた。

第1回から第3回までは、現代的なリズムのダンスを中心に第4回から第7回までは創作ダンスを中心に展開された。

現代的なリズムのダンスでは、手拍子からリズムをとることから始まり、指導者から示された振付のある動きを習得させた。その後、班毎に構成を変化させる課題を与えていた。主に早めのヒップホップの曲を用いていた。指導者は、全力で動くことを学習者に指示し、課題となる動きも全力で動かざるを得ないように、フロアの技が散りばめられた振付になっていた。

創作ダンスは、即興の基礎となる「シグナルタクシー」等を行った後、A4紙を用いた「ペーパームーブメント」を展開していた。即興でどれだけ動けるのか、学習者を追い込むような緊張感を持ち、どれもかなりの運動量があった。

フォークダンスは、「ハーモニカ」「シンキー・ディンキー・バーリ・ブー」を取り上げていた。

④学習者の感想

単元の最後に学習者へのアンケート調査を行った。授業の感想としてどの学生も、指導者が熱心であること、ダンスが想像していたよりもハードで体の限界を感じたことなどがあげられていた。また、授業内容の割合としては、現代的なリズムのダンスが多めだったので、自分が教師になったらリズムダンスを展開してみたいという学生もいる一方、表現が大事だと認識した学生も数名いた。

履修後の感想として次のものがあげられる。「(ダンスを)履修する前は自分のリズム感では無理(とと思っていた)。履修後は、リズム感ではなく、自分をどう表現できるか。」「ダンスと聞くと、上手に踊れないといけなと思っていたが、授業を受けて上手に踊るとかではなく、自分の感じたことをそのまま表現することが大事だと思った。」これらの感想を持った学生は、教師になったら創作ダンスを展開してみたいと回答している。例えば、「創作ダンスと聞くと、表現するのが難しいと思う子が多いと思う(実際自分もそうだった)。しかし、創作ダンスは自分を表現できる楽しいものだった。そこを伝えたいから。」といった回答がみられた。

⑤授業観察のまとめ

授業は毎回かなりの運動量で構成された。学習者は、まず自分との戦いを強いられる。これは学生の感想でも多く記述されていた。体力的に自分に負けない活動を通して、身体の感覚が研ぎ澄まされ、自分を表現してしまう状況になっていくことが観察された。隣の友人も体力的に苦しい状況にあり、共に頑張

るという雰囲気の中で「本音を言う」ような状況に違和感を持たない空気が作り出されていた。指導者は、ダンスそのものを指導しているのはもちろんだが、それを通して人間にとって身体とは、表現とは、何なのかを学生に問うていた。

研究当初は、リズムダンスそのものをどう教えるのかという点に着目して観察に出向いていたが、リズムダンスを通して、ないしその後のダンス領域の内容を通して、身体表現を教える授業であった。

(2) 中学生対象のダンス授業実践観察

23年度は、数校の中学校で授業実践を参観できた。

①二人組の活動

ある中学1年生の実践では、動くことよりもコミュニケーションを必要とする場面では学習者は困難に感じるということがわかった。例えば、「二人組を作って座る」という課題ですら、戸惑い立ち尽くしたまま二人組を作ることができない。生徒からは「話したことの無い子だったから組めなかった」といった回答があった。

②ダンサーの授業

ある中学2年生の実践では、外部講師としてヒップホップダンサーが指導者となった。その授業では、講師の振付を踊ることが課題であった。生徒たちは、恥ずかしがらずに授業に取り組むことができたが、振付を間違えないことに気をとられるようになり、自然と動きのダイナミズムが欠如していくことが観察できた。振付が「できた」「覚えられた」という視点に関心が集中してしまい、パラパラを踊るような全力ではない踊り方となり躍動するような身体のダイナミズムは見ることができなかった。

③学習困難校での実践

ある中学3年生の実践では、ジャージのズボンに腰まで降ろしている生徒も何人か見受けられ、学習の混乱が予想された。しかしながら、生徒たちは単元の3時間目となる授業で、リズムに乗りながら二人組をどんどん変えて躍動的に踊っていた。単元の初めでは①の中学生のように二人組を変えていくことに抵抗感を示したが、その課題ができるようになると授業後には「話したことの無い子と踊れた」となんと学習者の9割が学習ノートに記入したとのことである。この単元は、創作ダンスが中心であったが、導入部分に本時の内容につながるような動きを取り入れたリズムダンスを取り入れた。その結果、学習者同士のコミュニケーションが円滑に行われるようになり、授業にも勢いが出てきた。

その後、単元終盤には、班ごとに即興をもとにした創作ダンスが展開された。一番の要因は、指導者の指導力と熱意であるが、ダンスの力を教えられる実践であった。

(3) 実践実験

24年度は、自ら指導案を作成し、指導者が定める動きを習得させる指導法と、指導者が定める動きを極力少なくした指導法の2つを展開し、学習者の動きがどのように変化したかを考察した。

①設定

A群には、指導者が定める動き（振付のある動き）を習得させる指導法を主とした。B群には、指導者が定める動きを極力少なくし、即興活動を主とした指導法を主とした。単元の開始時と単元の終了時に音楽のリズムに乗って動くという課題を出し、学習者の動きがどのように変化したかを考察した。

対象者：大学生30名ずつ

実践期間：平成24年4月～7月

②結果

単元後の変化を見ると、音楽のリズムに乗って動く課題に対し、指導者が定める動き（振付のある動き）を習得したA群よりも、指導者が定める動きを極力少なくしたB群の方が、大きく動く学生が多かった。音楽のリズムに乗って動く課題とは、リズムを感じ得て自由に踊ることであるが、B群は授業でずっと即興的な課題を行ってきたので自ら動きを創出することに違和感がないようであった。しかし、A群は与えられた動きには慣れていて、自ら動きを創出してきていないため自らの意志でリズムに乗ることが難しかったと考えられる。

(4) 仮説の検証

仮説1) リズムダンスを指導するにあたり、「与える」要素が必要であろう。

→振付を「与える」と学習者はその動きができる・できないの価値基準になり、ダイナミックに動けなくなってしまう。指導時には「極限まで」「自ら」動くような課題を重ねながら、リズムに乗り友人とかかわることを手立てとすることが有効であろう。

仮説2) リズムに乗れる身体になる程、骨盤が横方向に動くようになるであろう。

→リズムに乗れていない身体は、身体の前が面状のまま動かない。リズムに乗れている身体は、面状ではなく曲状になっていくので必然的に骨盤が動くことになる。

(5) 総括

まず、熟練指導者のプログラム（学習者に与えたもの）は、学習者に対していくつかの要素を同時に教授するために考案されていた。それらの要素とは、①運動に挑戦することで捉える身体感覚、②学習者から「引き出す」ためのきっかけ、③意図的に動くことの意識化、である。また、学習者が異なると、同じプログラムを展開していても、指導のポイントが違う場合も見受けられたことは興味深い。本研究では、「リズムダンス」に着目したが、ダンス授業としては「リズムダンス」から「創作ダンス」へ移行することが多く、これらの学習を通して身体が変容していくことがわかった。

熟練指導者が「コミュニケーションスキル（人とかかわる力/いじめ予防）の育成」「表現する力」を重視し、身体の変容を目指しているのは、中学生の実践観察を通して理解することができた。現在の中学生は踊ったり運動することよりもコミュニケーションを必要とする場面で立ちつくしてしまうことがわかった。例えば、「二人組を作って座る」という課題ですら、戸惑い立ちつくしたまま二人組を作ることができない。ダンスの動き以前の諸問題（コミュニケーション能力の欠如、身体観のとらえ方等）が存在することがわかった。「躍動する身体」とは、自分一人の学びで獲得できるものではなく、一緒に学ぶ友人と共に得ることのできるものだということが改めてわかった。体育科でダンス学習を行う意味や意義を痛感させられたと共に、ダンス学習が身体教育に貢献できる可能性を再認識した。

研究に取り組む前は、ある程度の振付を教えることも良いのではないかという仮説を持っていた。しかし、外部講師のヒップホップダンサーが振付を教える実践を参観し、中学生の動きが極端に小さくなったのを見て衝撃を受けた。振付を踊ると大人も生徒もある課題を達成することができるので、「やった感」はある。しかし、計算問題を解答するように「間違えない」ことを重視してしまい、肝心の運動はセーブしてしまう。その後の実践実験でも、振りを与えた学習者と動きを引き出された学習者をみた場合も同様のことがいえる。自ら創発することなく動きを与えられればできるという他力の状態から、学習の最初は大変でも最終的には自分の意志や感覚で動きを創出できるようにすることの重要性を認識した。つまり、自分の意志や感覚で動きを創出する積み重ねがダンスそのものであり、身体教育として着目しなければならない点であろう。実態を捉えたダンス学習は、既存のものを教えることよりも、授業過程の中で身体や感性をいかに変動させ気づいていくかを重視することといえる。

う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 寺山由美 (2010) : 創作を主とする舞踊教育の生成過程—「与える」から「引き出す」授業への萌芽—. 舞踊教育学研究 12 : 5-18. 査読有
- ② 寺山由美, 細川江利子 (2011) : 表現・創作ダンスの学習における「即興表現」の指導とその捉え方—実践を続けてきた4人の教諭に着目して—. (社) 日本女子体育連盟学術研究 27 : 21-38. 査読有
- ③ 寺山由美, 米澤麻佑子, 宗宮悠子, 大野ゆき (2012) : ベテラン指導者の指導技術を探る—「ダンス」指導時の事例から—. 筑波大学体育科学系紀要 35 : 81-89. 査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺山 由美 (TERAYAMA YUMI)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号 : 60316784